名古屋芸術大学キャリアセンター紀要　第12号　103〜116頁(2023)

小学校英語授業における教員の語り方：
教室英語の知識を現場でのキャリアに繋げる

Teachers' Ways of Talking in Elementary School English Classrooms:
Adapting Knowledge of Classroom English to the Actual Classroom Situation

早川　知江　*HAYAKAWA Chie*

0. はじめに

小学校での英語教育は、英語で行うことが義務ではないが推奨されている。現行の小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説に「外国語活動を実施する際に，児童に活発なコミュニケーションの場を与えたり［...］するためには，指導者に，ある程度，英語をはじめとする外国語を聞いたり話したりするスキル［...］が求められる（p48)」とあるように、教師は児童に英語を教えるだけでなく、教える過程でコメントや問いを英語で発せられることが望ましい。そのため、教師が自分で教室英語訓練ができるような教室英語表現集の存在が求められている。

本稿は、名古屋芸術大学小学校教員養成課程（以下「小免課程」）科目「外国語科指導法（英語）」（以下、「外国語科指導法」）での教授内容・教授法を工夫することで、学生が将来的に小学校英語教育の場で必要とされる教室英語を効果的に身につけられる指導法を考える研究の一環である。今回は、市販の教室英語表現集に載っている英語表現を実際に小学校で使う場合の、教師の「語り方」の工夫を、主に言語発達理論に則って提案することで、より児童に理解されやすく効果的な英語使用に結びつけることを目指す。

本稿に先立ち、早川（2022）では、特に英語絵本読み聞かせ活動に焦点を当て、小学校教師が教室で用いることのできる平易な英語表現を集めた表現集をつくることを試みた。この表現集は以下の 3 つの特徴をもつ：

・絵本読み聞かせに特化した表現がまとまっている
・教師が英語が苦手であっても、自信をもって用いることのできる平易な表現を厳選している
・児童から見ても、語彙的・文法的に難しすぎない表現を用いている

しかし、実際に大学の小免課程科目「外国語科指導法」で、受講生がこの表現集を用いて絵本模擬読み聞かせを行なったところ、以下の問題点が明らかになった：

・「平易な」はずの表現であっても、教師役の受講生が正確に使いこなせない場合がある
・「平易な」はずの表現であっても、児童役の受講生が意味を理解できない場合がある

・児童役の受講生が英語の意味を理解できないと、教師役は咄嗟に日本語で言い直してしまう

こうした問題を解決するため、早川（2023）は、教室英語表現集に載せる表現をさらに平易なものに置き換えるよりも、元の表現とより平易な表現を併記することで、児童が理解できなかった場合にのみ、平易な表現に言い換えることが重要と考えた。この「言い換え」のために、CDS（Child-Directed Speech；大人や年長者が子どもに語りかける話し方）の理論を応用し、英語表現を児童の側から見て理解しやすく、反応しやすいものに変える具体的方策を示した。

本稿は、これら一連の研究に対し、新たに異なる観点から効果的な教室英語使用法を提案するものである。新たな観点とは、英語表現そのものの難易度にこだわるのではなく、それを使う教師の「語り方」に着目するという点である。本稿では、児童が教室英語の意味をより理解しやすくなる「語り方」を提案することで、学生の教室英語に関する知識を学校現場でのキャリアに結びつけることを目指す。具体的には、学生／教師が「覚えた」教室英語を児童に「理解」しやすくするため、発達言語学の理論に基づき、①身振りや表情などの「社会的キュー」を与える、② 発話の「かたまり」全体に対する意味から、統語的知識を用いて個々の単語の意味理解に結びつける、という２つの方策を提案する。

第１節では、本稿の研究の基となる早川（2022, 2023）の研究を概観し、教師が教室で使いやすい英語表現集とはどのようなものかを見る。第２節では、そうした表現集を用いて教師がいくら教室英語を覚えても、児童がその表現を理解できなければ意味がないという見地から問題の所在を明らかにする。そして、児童に英語を理解してもらうための上記２つの方策について、例を用いながら具体的なやり方・工夫の仕方を説明する。第３節では、早川（2022）で作成した表現集中の英語表現について、どのような「語り方」で導入すべきか、具体的な教授法を提案する。

1. 早川（2022, 2023）の概要

1.1 早川（2022）の概要

早川（2022）は、特に小学校での英語絵本読み聞かせ活動に焦点を当て、小学校教師や教師を目指す大学生が使用しやすい教室英語表現集の作成を目指した。小学校での英語教育が義務化されたのに伴い、教師のための教室英語表現集は、既にさまざまな形で公開・出版されている。現状、小学校教師や教師を目指す小免課程学生が手に入れられる教室英語表現集としては、主に以下の３つの形態がある：

・大学の小免課程での使用を想定した教科書やその付録
・県教育委員会や教育センターが提供するウェブサイト
・市販の小学校教室英語表現集

しかし、これらの表現集には、① 絵本読み聞かせに特化したものではない、② 語彙・文法レベルが、教師が使いこなすにも、また児童が聞き取るにも適さない高レベルなものが多い、という 2 つの問題点がある。早川（2022）は、この 2 つの問題点から出発して、「教師にも児童にも優しい」、より使いやすい表現集を作成することを目指した。

まず問題点①は、読み聞かせで使用する表現があちこちに散在しているという問題である。既存の教室英語表現集では、さまざまな「見出し」の下に、そこで使える英語表現をリストアップしているが、見出しは、教室で想定される「場面」（例：授業の始まり、終わり）、または「機能」（例：褒める、指示する、注意する）を示し、「場面」として「絵本読み聞かせ」を設定した表現集は（現在探した限りでは）ない。そのため、例えば、読み聞かせを始める表現 Is everybody ready? は、「授業の始まり」の見出し下に記載され、挿絵中のものの名前を英語で尋ねる What do you say it in English? は、「前時の復習」の見出し下に記載されており、使用者は、読み聞かせに使える英語表現をあちこちから探さなくてはならない。

続いて問題点②とは、市販の教室英語表現集で用いられている英語は、語彙的にも文法的にも小学校英語のレベルを超えており、教師が暗記に苦労するだけでなく、使用しても児童に通じない可能性が高いという問題である。そこで早川（2022）では、語彙的・文法的に以下のような基準を設けて、教室英語表現集に載せる表現を選定した。まず語彙的には、「外国語」が教科化されるのに伴い、民間の教科書会社が検定済教科書を用意するまでの「暫定教科書」として文科省が作成した、小学校 5-6 年生向け教科書 *We Can!* 1, 2 に載っている全単語をリストとして示し、これらを「小学生が知っていると想定できる単語リスト」とした。また文法事項の中でも、特に文の複雑さに関連する「文型」については、小学校学習指導要領（2 内容〔第 5 学年及び第 6 学年〕エ 文及び文構造）に、小学校のうちに学ぶべき文型として掲げられている、a [主語＋動詞]、b [主語＋動詞＋補語]のうち動詞がbe動詞であるもの、c [主語＋動詞＋目的語]のうち目的語が名詞か代名詞であるもの、を「小学生が知っていると想定できる文構造」とした（これは、いわゆる「5 文型」の考え方では、第 1 文型（SV）、第 2 文型（SVC）、第 3 文型（SVO）の 3 種のみであり、しかも第 2 文型の動詞（V）はbe動詞のみということである。同じ第 2 文型でも、You look happy.（あなたは幸せに見える）などの一般動詞を述語とする文は範疇外ということになる）。

上記の前提に基づき、早川（2022）では、以下の方針で新しい表現集を作成した：

（1）市販の小学校教室英語表現集 3 冊の中から、絵本読み聞かせ時に教員が児童にコメントしたり質問したりするのに使用できる表現を抜き出す
（2）その中から、「小学校英語教育に適切な語彙・文法的レベル」を超えている表現を抜き出す

(3) それらの高度な表現を、「小学校英語教育に適切な語彙・文法レベル」に沿って書き換える

この (3) の手順について一例のみ挙げると、I'm now going to read you a story.（これからお話を読んであげますね）という表現は、以下の点で「小学校英語教育に適切な語彙・文法レベル」を超えている。つまり、文型が「read 人 モノ」をとる第 4 文型であり、be going to（これから～するつもりです）の熟語も小学校の学習範囲を超えている。そのため、ほぼ同じ意味と機能を持つ、It's a story time!（お話の時間ですよ）などの第 2 文型に書き換えるということである。

1.2 早川（2023）の概要

早川（2023）は、早川（2022）で作成した教室英語表現集を、実際に小免課程学生（2022 年度前期「外国語科指導法」受講生 36 名）に使用してもらい、検証を行なった。その結果、早川（2022）で提案した表現集でもまだ難しすぎる側面があることを明らかにし、その改良を行なった。

学生たちは、早川（2022）提案の教室英語表現集を学んだ後、以下のように英語絵本の模擬読み聞かせ活動を行った：

・表現集：プリントアウトして全員に配布し、読み聞かせに先立ち一通り発音練習
・グループ：受講生を 6 人× 6 グループに分け、各グループ 1 名が教師役、残り 5 名が児童役
・使用絵本：Eric Carl絵・文 *The Very Hungry Caterpillar*
・学生への指示：
　教師役は、なるべくたくさん英語の声かけや問いかけを挟みながら、絵本を読み聞かせること。
　必要なら表現集を見ても良いが、英語表現はできる限り前もって暗記しておくこと。
　児童役は、教師の問いかけに対してなるべく返答することとし、可能なら英語で返答すること。

こうした条件・指示のもと読み聞かせを行った結果、「教師にも児童にも優しい」ことを想定した表現集であっても、以下の問題点をもっていた：

(1)「平易な」はずの表現であっても、教師役の受講生が正確に使いこなせない場合がある
　① 英語表現が思い出せず、日本語の問いかけになってしまう
　② 表現集に載っていた表現を、一部の単語や文法を間違えて使ってしまう
(2)「平易な」はずの表現であっても、児童役の受講生が意味を理解できない場合がある

①児童が、教師の発話の意味を取り違えて返答してしまう
②児童が、教師の発話の意味が分からずに答えられない（または日本語で意図を聞き返してしまう）

(3) 児童役の受講生が英語を理解できないと、教師役は咄嗟に日本語で言い直してしまう

そのため早川（2023）は、(2) のように児童が教師の発話を理解できない場合の対処法として、CDS（Child-Directed Speech）の理論を応用し、「使用した英語をより平易な表現に言い換える」方策を提案した。CDSは、大人や年長者が子どもに話しかけるときの話し方全般を指す用語であり、以下のような言語的特徴をもつ（Ward 2004；岩立、小椋 2017: 30；伊藤 2018: 70 など）：

1. テンポ（＝速さ）がゆっくりしており、ピッチ（＝声の高さ）が高い
2. ピッチを大きく変化させたり、強制（＝強く発音する部分）を誇張するなど、大げさな韻律を用いる
3. 繰り返しが多い（少数の語や節を繰り返し言う）
4. 疑問文や命令文が多い（子どもにはたらきかける言語使用が多い）
5. 文法を簡素化する（発話の長さが短い。文と文を繋ぐ場合に、ifやwhenなどの従属接続詞を用いず、and, orなどの等位接続詞のみを用いる）
6. 内容を「今、ここ」の具体的なことに制約する。抽象的な用語（例：a gentleman）よりも具体的な固有名詞（例：Mr. Brown）を用いる
7. 文法構造を単純化する（例：How was the party?（パーティーはどうだった？）のようなWH疑問文に子どもが答えられないと、Did you enjoy the party?（パーティーは楽しかった？）のような、Yes/Noで答えらえる疑問文に切り替えるなど）

これらの特徴をもつCDSは、子どもが 1）大人の発話を聞き取りやすく、2）理解しやすく、3）返答しやすいなどの点から、子どもの言語発達を促すと言われている。

上記のCDSの特徴を当てはめると、教師は、自分の発話が理解されていないと感じたら、以下の 1-4 の方策を取ることが有効だと言える：

1. 同じ表現でいいので、ゆっくり、はっきりと、一番聞き取ってほしい単語を強調しながら繰り返す（特徴 1-3 より）
2. 意味が通じる範囲で単語数を減らして発話し直す（＋ジェスチャーで意味を補う）（特徴 5 より）
3. 子どもの状態に合わせた、より具体的な言い方に置き換える（特徴 6 より）
4. WH疑問文をYes/No疑問文に置き換える、あるいは返答の選択肢を示す（特徴 7 より）

早川（2023）では、上記方策に基づき、早川（2022）に載せた教室英語表現全てに対し、その表現が児童に通じなかった場合の「言い換え」表現を提案した。ここでは、方策 2-4. に基づく言い換え例を、以下に１つずつ示す：

【方策２に基づき、単語数を減らしてジェスチャーで補う】
What are we going to read today?（今日は何を読むのかな？）
→ What story?（何のお話？）＊絵本を掲げつつ、子どもを見渡して

【単語数を減らすとともに、方策３に基づき、around me（私の周り）をより具体的な here（ここ）に】
Please come around me.（私の周りに集まって）
→ Come here.（ここにきて）＊自分の周りを指差しながら

【単語数を減らすとともに、方策４に基づき、WH 疑問文に対して返答の選択肢を示す】
What's in this box?（この箱の中には何があるかな？）
→ What's inside? A book? A pencil?...（中には何がある？ 本かな？ 鉛筆かな？）
＊箱を指差しながら、ありうる選択肢を順に提示

2. 問題の所在：教室英語を児童に理解させるには

前節に示したように、早川（2022, 2023）は教師が用いる教室英語表現集を提案・改良するものであった。しかし、そのようにいくら表現集を改良し、かつ教師がそこに載っている表現を覚えても、実際の教室で児童がその表現を理解できなかったら意味がない。それが本稿の問題の所在である。

実際、早川（2023）で行った「外国語科指導法」内の絵本読み聞かせ訓練でも、児童役の学生がそもそも教師役の使った教室英語を理解できないか、あるいは取り違えて返答する場面が頻繁に見られた。よって本稿は、表現集自体の改良ではなく、むしろそこに載っている表現を実際に使用する際の教師の「語り方」を工夫することで、児童に英語表現を理解しやすくする方策を、言語発達理論の見地から考察・提案する。

その方策は主に、①身振りや手振りなどの「社会的キュー」を与えながら表現を用いる②統語的知識を喚起し、新しい語や表現の意味理解に結びつける、の２つである。第 2.2 節に述べる理由により、①の方策は主に英語学習の初期（小学 3, 4 年生の「外国語活動」）に適しており、②の方策は主にある程度英語の文法を理解してからの時期（小学 5, 6 年生の「外国語」）に適したものである。本節では、この２つの方策が基づく理論と、それを利用した具体的な「語り方」の工夫を論じる。

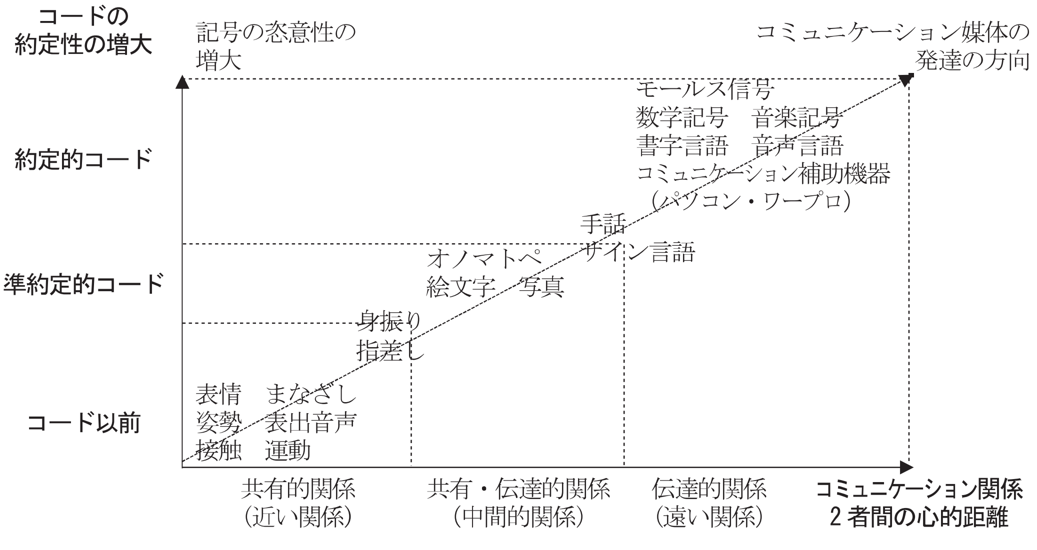
2.1 方策①：身振りや表情などの「社会的キュー」を与える

人がことばを獲得するときには、周りからのさまざまな「社会的キュー」を手掛かりに新しい表現を身につけていく。ことばが発せられた状況の中で、子どもは大人の視線や表情を手掛かりとして発話の意味を推測するが、その際に大人が発する（意識的か無意識的かに関わらない）手掛かりや、手掛かりとなる社会的状況を、社会的キューと呼ぶ（トマセロ 2006）。

ごく単純な例を挙げれば、バナナの絵（または実物）を子どもに示しながら「バナナだね〜」と言えば、子どもは、絵または実物を手がかりに、「バナナ」というのが、黄色くて細長い果物のことだと理解するだろう。あるいは、大人がバナナを食べて、微笑みながら「おいしい」と言ったり、顰めっ面をして「まずい」と言ったりすれば、それぞれ、「おいしい」がバナナの好ましい性質を、「まずい」が好ましくない性質を表す表現だということを学ぶ。また、社会的状況全体が手掛かりとなる場合もある。例えば、周りの大人が別れ際にいつも「バイバイ」と言うのを聞けば、子どもはそれを手掛かりとして、「バイバイ」が別れの挨拶であることを知る。子どもに物を渡すときに何度か「どうぞ」と言えば、「どうぞ」が提供の表現であることも分かる。こうした社会的キューとなりうる手段は、発話者の表情、姿勢、視線、音声（声の高さや調子)、身振りを含む動き、指差し、絵や写真など広範にわたる。

このように、人のコミュニケーションは、身振りや表情など恣意性の少ない伝達手段から始まり、それを手掛かりとしながら、音声言語や書字言語など恣意性の高い記号によるコミュニケーションへと発達していく。その発達の仕方を、鯨岡（1997）は図 1 のようにまとめている。

図 1：コミュニケーション媒体の発達



（鯨岡 1997: 177 より、簡略化して掲載）

図１から言えることは、左下の「２者間の距離が近い」「恣意性の低い」伝達手段が、右上の「２者間の距離が遠い」「恣意性の高い」伝達手段を身につける基礎となるということである。これは主に、人が母語を身につける過程についての記述だが、今日では、第二言語習得も、特に学習者の年齢が低い場合（8-9歳以下）は、母語の習得と同じような過程・仕組みで起こると考えられている（伊藤 2018、佐藤 2018、白井 2012）。そこで本稿は、教室英語を用いる際、児童が「２者間の距離が遠い」「恣意性の高い」伝達手段、すなわち英語を理解するための「社会的キュー」として、教師が積極的に「２者間の距離が近い」「恣意性の低い」伝達手段、すなわち表情・まなざし・姿勢・音声・接触・運動・身振り・指差しを用いることを提案する。その具体的使用法については第３節で述べる。

2.2 方策②：統語的知識を喚起する

子どもが、前節に紹介したような表情や社会的状況などの手がかりをもとに言語を身につけていくとすると、初期の獲得表現は「単語」単位ではなく、何単語かが集まった「かたまり」単位となることが多い。例えば、子どもが何か望ましくない行為をした場合、養育者が常に「それダメ」と言ってその行為を止めた場合、子どもは「それ」や「ダメ」という個々の単語の意味を結びつけて発話全体の意味を理解するのではなく、「それダメ」という発話全体と、その行為を止められるという社会的キューを結びつけ、「それダメ」という音声のかたまりが「禁止」という意味だと理解するだろう。

実際、乳幼児の言語発達検査法の１つである日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙（MacArthur-Bates Communicative Development Inventories; 以下日本語CDIs）の結果でも、10ヶ月の子どもの55％が「あっち」「こっち」という指示詞に先駆けて「こっちへおいで」という表現を理解しており、「こっちおいで」という文全体としての意味を、話し相手の非言語的行動（例えば手招き）を含めた文脈全体から理解し、適切な行動をとることができるという（岩立、小椋 2017：42）。

小学校3, 4年生ごろの初期の英語習得が母語習得と同じ過程を経るとすると、英語学習初期においては、子どもたちはGood morning.（おはようございます）やThank you.（ありがとう）、Come here.（こちらに来て）を、単語に分離させず、「かたまり」として、音声全体と意味/使用状況を結びつけて理解しているだろう。その場合、good, thank, hereなど個別の単語の意味は正確には理解していない可能性がある。

学習の初期段階においては、もちろんこれで問題ない。実際、現行の小学校学習指導要領においても、小学3, 4年生の「外国語活動」では、英語は音声として扱われるのみで、文字の読み書きは扱われない。単語は、文字で表記される場合にはスペースで区切られることで明確になるが、音声では前後の単語と一続きになるため、その区切りは明示されない。文字が使用されない3, 4年生の段階では、必然的に英語は「かたまり」として理解していれば良いということになる。

その後、5, 6 年生になって文字の取り扱いが始まる頃から、「単語」というものを意識し、統語的知識を喚起することで新しい語や表現の意味理解に結びつける方策が利用できるようになる。統語的知識を使って新しい語の意味を推定するというのは、例えば「こらる」という新出語（ここでは架空の語を用いる）に出会った場合、その使い方が「こらるを見た」であれば、こらるを名詞として（「名詞」という用語を子どもが知らなかったとしても、「ものの仲間」として）認識するだろう。あるいは「パンをこらる」であれば動詞として、「こらる木の実がありました」であれば形容詞として認識し、前後の文脈や、同じ語が使われる他の用例なども併せて、徐々にその正確な意味を獲得していく。

本稿の主眼である「教室英語を使用するときに、児童の理解を助ける語り方」としてこの統語的知識を利用するとすれば、例えばこのような語り方があるだろう：

What's in this box?（この箱の中には何がある？）
児童が理解できなければ、発話を短くする（＝早川（2023）で示した、CDSに基づく方策 3）
→ What's inside?（中には何がある？）
さらに児童が理解できなければ、文脈的にありうる選択肢を提示して答えやすくする（＝早川（2023）で示した、CDSに基づく方策 4）
→ What's inside? A book? A pencil?....（中には何がある？ 本かな？ 鉛筆かな？…）
さらに児童が理解できないか、そもそもinsideの意味が分からないと思われる場合は、
→ Inside（と言いながら箱の中を指す）. Outside（と言いながら箱の外を指す）.（鉛筆を箱の中に入れて）A pencil INSIDE the box.（鉛筆を箱の外に出して）A pencil OUTSIDE the box. Now, what's INSIDE the box?（発話中、全て大文字で表記してある単語は強調して発話する）。

上記のように、A pencil (　) the box. という共通の統語構造を利用して、反対語のinsideとoutsideを社会的キュー（鉛筆を箱の中や外に位置させる）と共に導入することで、その意味を理解させることができる。そのほかの具体的使用法については第 3 節で述べる。

3. 教室英語表現集の実践：「語り方」の工夫とともに

本節では、第 2.1 節（社会的キュー）、第 2.2 節（統語的知識）に示した 2 つの方策を用いて、教室英語をどのような「語り方」で使用すべきか、早川（2022）で提案した表現集中の英語表現のいくつかを用いて例示する（既に提案した教室英語表現集全体については、早川（2022）表 2 を参照のこと）。

3.1 小学校 3, 4 年生「外国語活動」において：社会的キューを中心に

まず、音声表現を「かたまり」として場面に結びつけて理解する小学校 3, 4 年生の「外国語活動」においては、教師は社会的キューを中心に「語り方」を工夫するのが適切だろう。さまざまな社会的キューの中でも、教室において学外の社会的状況を再現するのは難しいため、利用しやすいのは、① ジェスチャーや指差し、② 実物や写真の提示、③ 実演である。

以下、①ジェスチャーや指差しと共に用いると効果的と考えられる教室英語表現例を、表 1 としてまとめる。

表 1：ジェスチャーや指差しと共に導入すべき表現例

英語表現	日本語	ジェスチャー・指差しのしかた
Wait quietly for now, okay?	お話が始まるまで、静かに待っててね	唇に人差し指を当てて
Please come around me.	私の周りに集まってね	自分の周りを指差しながら
Sit on the floor now.	床に座ろうね	辺りの床を手で叩きながら
Move closer.	少し前進してくれますか	手招きしながら
Move over.	少し詰めて（移動して）	詰めてほしい方向に手を動かしながら
Can you see the book? OK?	本が見える？大丈夫？	自分が絵本を見ながら。OK?の部分で頷いてみせる
What are we going to read today?	今日は何を読むのかな？	絵本を掲げつつ、子どもを見渡して
Do you know this story? Yes? No?	前にこの本を読んだことがある人？ あ る？ない？	Yesと言いながら頷き、Noと言いながら首を振る
Know this? Anyone?	これ、知ってる人？	Anyone?と言いながら手を挙げる
Listen.	よく聞いてください	「何？」というように耳に手を当てながら
Can you be quiet, please? / Don’t talk.	静かにしてくれますか？	唇に人差し指を当てながら
Sit up.	きちんと座ってね	背筋を伸ばして座る真似をしながら
What is this? Anyone?	これが何かわかる人？	Anyone?と言いながら手を挙げる
What does “elephant” mean? Elephant is…	Elephantってどういう意味？	“Elephant” is…” を上げ調子でいいながら、子ども達を見渡し、続きを言うよう促す
Repeat after me. “Monkey”	私のあとについて言ってみて	“Monkey.” と発音した後、頷きながら手招きし、発話を促す
Where is capital B? Is this B? No?	大文字のBを指してくれますか？	わざと違う文字を指し、首を振ってみせる
I like Saori’s ideas!	サオリちゃんは想像力があるね	「いいね」というように親指を立てる
Find a blue bag. Where is it?	青いバッグを見つけてね	絵本のあちこちを探すように指でたどりながら
Let’s count the sheep. One, two, three…	羊を数えましょう。1, 2, 3…	Sheepと言いながら羊の一匹を指差し、One, two, three…の順に指を移動させていく
Are you sure? Let’s check.	答えが合っているか見てみよう	「いい？」というように人差し指を立てる
You have thirty seconds.	30 秒でやってね	腕時計を指差して見せてから、指を立てる数で「3 → 10」を示す
How interesting!	面白いね！	大きく頷きながら（納得した表情）
Funny story!	おかしいね！	笑って見せながら（面白がる表情）
That can be dangerous!	それは危険ですね！	胸を押さえながら（心配する表情）

He will get hurt! Oh, no!	ケガをしたら大変！	目を覆いながら（怖がる表情）
I'm so scared!	私、とても怖い！	震えてみせる（怖がる表情）
Read one more time?	もう一度、読んであげようか？	絵本を開いて見せながら
Can you put this back?	これを元の場所に戻してくれる？	片付ける場所を指差しながら

表１の右欄が示すように、一口に「ジェスチャー」と言っても、身体をつかうもの、頷くなど頭を動かすもの、視線を向けるもの、表情を作るもの、と表現の手段は多様である。教師や教師を目指す学生の訓練法としては、これらのジェスチャーを「覚える」というより、英語表現の意味に従って自然に身体が動くように、英語表現を暗記する時点で身体を動かしながら覚えることが重要だろう。

こうした方策の基本となっているのは、「共同注意」という現象である。共同注意とは、概略、他人が注意を払っているモノに対して自分も注意を向けるという、生後８ヶ月頃から既に発達し始める認知能力である（岩立、小椋 2017：28 など)。これがあるために、教師が注意を払うモノに対して児童も注意を払い、教師のそのモノに対する反応を児童も真似するという原動力になる。

例えば、表１中にも示したCan you see the book? OK?（本が見える？大丈夫？）という表現は、児童を見ながら言うよりも、むしろ教師自身が絵本を覗き込みながら言った方が効果的である。教師の視線の向け方により、教師がその絵本に注目していることがわかり、共同注意の原則により、児童は「それは見るに値するものだ」という認識をもつからである。同様に、Listen.（よく聞いてください）と言うときには、児童を静かにさせようと思って唇に指を当てるよりも、「何？」というように耳に手を当てながら、すなわち教師自身が「聞きたい」と思っているようなジェスチャーをした方が、児童も「今から聞くに値する話がある」と認識をもつため、効果的だろう。

続いて、②実物や写真の提示と共に用いると効果的と考えられる教室英語表現例を、表２としてまとめる。この方策は、新しい単語を導入する際に常に用いることができ、その単語が意味するモノや動作を表した絵カードを見せながら発音を聞かせれば、日本語訳に頼らずに、英語音声と意味とを直接結びつけて理解させることができる。単語以外の教室英語と共に写真や実物を用いる例を表２に見る。

表２：実物や写真と共に導入すべき表現例

英語表現	日本語	見せるべき実物・写真
It's a story time!	これからお話を読んであげますね	絵本を見せながら
Look at this picture.	この絵を見てください	絵を指差しながら
What's in this box?	この箱に何が入っているかな？	箱を持ち上げ振って見せたり、振って音を確かめてみる
What does "elephant" mean?	Elephantってどういう意味？	答えられなさそうなら、黒板に象の絵を描く

What animals do you like?	どんな動物が好き？	答えられなさそうなら、さまざまな動物の絵や写真を順に提示し、Do you like cats? Do you like dogs? などのYes/No疑問文に切り替える
What did Ron say?	ロンはなんて言った？	当該ページを開いて、Ronを指差すことで、どの場面の話かを視覚的に提示

この方策を用いる注意点としては、あらかじめ準備がいる場合があるということである。絵本を読み聞かせる場合であれば、その絵本内の挿絵を提示することはすぐにできる。しかし、What animals do you like?（どんな動物が好き？）と質問したとき、絵本に出てこない動物を示そうと思ったら、教師はあらかじめ自分がそのような質問をするという前提で、さまざまな動物の写真や絵カードを用意していかなければならない。

最後に、③の実演と共に用いると効果的と考えられる教室英語表現例を、表3としてまとめる。これは、指示をするとき全般に有効な方策で、例えばWho likes cats? Raise your hand!（猫が好きな人？手を挙げて）と言ったとき、ただ指示するだけでなく、Raise your handと言いながら教師も手を挙げて見せることで、児童にその指示の意味を伝えたり、動作を促すことができる。

表3：実演と共に導入すべき表現例

英語表現	日本語	実演
Can you do this?	これ（＝片脚立ちしている動物の絵を指し）できる？	自分が片脚立ちしてみせてから、Do it!（やってみて！）
Now, you’re a monkey!	おサルさんみたいに動けるかな？	サルの真似をデモンストレーションしてみせてから、Your turn!（みんなの番だよ！）

3.2 小学校5, 6年生「外国語」において：統語的知識を中心に

次に、ある程度英語の構造を理解し、文字の導入によって「単語」という概念が生まれる小学校5, 6年生の「外国語」においては、教師は統語的知識を利用して語り方を工夫するのが適切だろう。統語的知識の中でも、小学校英語教育の時点で用いやすいものとして、① 同じ統語構造を用いて、ターゲットとなる単語だけを変化させていくことで、文章の意味を理解・定着させる、② 逆に、同じ単語を用いてさまざまな統語構造の中で用いることで、単語の意味を理解・定着させる、という方策がある。

まず①について説明すると、例えば、What color is the dog?（犬は何色ですか）、What’s in this box?（この箱に何が入っているかな？）のような疑問文を提示したとする。しかし、質問の意味自体が理解されない場合、そもそもそれが「問いかけ」であるため、ジェスチャーといった社会的キューを与えることも難しい。その場合、例えば、The dog is… red? No. The dog is… blue? No.（犬は…赤かな？ 違うね。犬は…青かな？ 違うね）のように、The dog is….（犬は…色である）という同じ統語構造に、児童が既に馴染みがあると思われるred, blue, yellowなどの色を表す単語を順に入れていくことで、「今は色の話を

しているのだ」と理解させることができる。その後改めて What color is the dog? と問い直せば、実際の色を見て、児童はWhite!（白！）のように答えられるだろう。

このような方策は、単純なように見えて、社会的キューよりも高度な児童の言語的知識を利用している。それはつまり、音声表現と場面を一対一で結びつけていた段階から、「文は単語から成り立っており、単語を入れ替えていくことで、状況に合ったさまざまな意味を表すことができる」という知識である。この場合、The dog is.... という文の枠組みは同じでも、その一部の単語red / blue / yellowを入れ替えていくことで、異なる意味を表すことができた。つまり、その部分に「色を表す単語を入れることができる」というヒントを教師が与えることで、逆に文全体が「色に関する記述である」と児童に予想させることができる。

逆に、②同じ単語を用いてさまざまな統語構造の中で用いることで、単語の意味を理解・定着させる、とはどのような方策かを見る。第2.2節では、「こらる」という日本語の新出語（架空の語）を例に、統語構造の中に置くことで、その品詞や意味が徐々に推察できることを見たが、英語の新出語についても全く同様のことが当てはまる。例えばelephant（ゾウ）という語を新たに導入した場合、Elephants are big.（ゾウは大きいです）、I like elephants.（私はゾウが好きです）、I saw elephants, tigers, and monkeys at the zoo.（私は動物園でゾウとトラとサルを見ました）、のように、elephantを用いたさまざまな文章を聞かせることで、それが名詞であることや、tigerやmonkeyと同列に置かれる動物らしい、ということが理解される。こうした方策は、新出語を導入するときに限らず、既に意味の分かっている単語を定着させるのにも効果的で、同じ単語をさまざまな統語構造に置いて見せることで、単語の意味、用例に慣れ親しむことができる。

4. まとめ

ここまで、小学校における「外国語活動」「外国語」の授業を念頭に、教室で英語表現を使用する際の教師の「語り方」について、発達言語学の諸理論に基づき、①身振りや表情などの「社会的キュー」を与える、② 統語的知識を用いて個々の表現・単語の意味理解に結びつける、という2つの方策を用いることで、児童により理解しやすい教室英語の使い方を提案した。

教室英語については、早川（2022、2023）で提案したものだけでなく、市販の教室英語表現集が数多く出版されている。しかし、それらの表現集がいくら掲載する表現を工夫しようと、教師や教師を目指す大学生が熱心にそれらの表現を覚えて使用しようと、それらの英語が児童に理解できなければ意味がない。本稿は、それらの教室英語を実際に「使う」際の「語り方」を工夫することで、学生の「知識」を学校現場での「キャリア」に結びつけることを目指した。

今後は、こうした方策を「外国語科指導法」をはじめとする小免課程での教育に取り入

れ、例えば、教室英語を暗記する際にはジェスチャーをしながら覚える、などの具体的指導法を確立したい。また、本稿は英語を教える際にテーマを絞って論じたが、こうした「ことば」に対する工夫は、国語科教育などにも活かすことができるだろう。日本語に関しても、表現を、ジェスチャーや表情などと結びつけて理解しておくこと、語彙や表現を統語的に見て新たな気づきを得ることは、母語に対する新鮮な気づきにもつながる。学生が、得た知識をどのように使ってキャリアに活かしていくか、今後もその方法の研究を続けていきたいと考える。

参考文献

Gardner, B. and Gardner, F. 著、松川禮子 監修、平松貴美子 日本語版翻訳・執筆『小学校ではじめて英語を教える先生のための 教室英語ガイド』Oxford University Press. 2005 年

Ward, S. *Baby Talk.* London: Arrow Books. 2004 年

伊藤 克敏「言語習得論～母語習得過程に見る英語指導への示唆～」『子どもに英語を教えるための基礎知識 1』アルク 2018 年 pp.67-79

岩立 志津夫、小椋 たみ子 編著『やわらかアカデミズ・〈わかる〉シリーズ よくわかる言語発達［改訂新版］』ミネルヴァ書房 2017 年

鯨岡 峻『原初的コミュニケーションの諸相』ミネルヴァ 1997 年

佐藤 久美子『イラスト図解 小学校英語の教え方：25 のルール』講談社 2018 年

白井 恭弘『英語教師のための第二言語習得入門』東京：大修館書店 2012 年

トマセロ , M. 著、大堀壽夫、中澤恒子、西村義樹、本田啓 訳『心とことばの起源を探る――文化と認知』勁草書房 2006 年

早川 知江「英語絵本読み聞かせに活用できる英語表現集の開発：小学校外国語教育における読み聞かせ技術の向上を目指して」『Proceedings of JASFL』Vol. 15 日本機能言語学会 2021 年 pp.267-288

早川 知江「英語絵本読み聞かせのための教室英語表現集の提案：英語が苦手な教員が小学校「外国語活動」を英語で行うために」『名古屋芸術大学研究紀要』第 43 巻 2022 年 pp.267-288.

早川知江「英語絵本読み聞かせのための教室英語表現集の提案：実践検証と表現集の改善」『名古屋芸術大学研究紀要』第 44 巻 2023 年 pp.179-193

樋口 忠彦、加賀田 哲也、泉 恵美子、衣笠 知子 編著『新編 小学校英語教育法入門』研究社 2017 年

文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）外国語活動・外国語編』2017 年

文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編』2017 年